

BEST AVAILABLE COPY

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-153981

(43)公開日 平成5年(1993)6月22日

(51)Int.Cl. ⁵ C 12 N 15/54 A 01 H 5/00 5/10	識別記号 ZNA	序内整理番号 A 8502-2B 8502-2B 8828-4B 7236-4B	F I C 12 N 15/ 00 5/ 00	技術表示箇所 A C
---	-------------	--	-------------------------------	------------------

審査請求 未請求 請求項の数3(全17頁) 最終頁に続く

(21)出願番号 特願平3-316935	(71)出願人 三菱商事株式会社 東京都千代田区丸の内2丁目6番3号
(22)出願日 平成3年(1991)11月29日	(71)出願人 三菱化成株式会社 東京都千代田区丸の内二丁目5番2号
	(72)発明者 中島 みどり 神奈川県横浜市緑区鶴志田町1000番地 株式会社植物工学研究所内
	(72)発明者 寺田 理枝 神奈川県横浜市緑区鶴志田町1000番地 株式会社植物工学研究所内
	(74)代理人 弁理士 長谷川 一 (外1名) 最終頁に続く

(54)【発明の名称】 アミロース含量の改変されたイネ科植物およびその製造法

(57)【要約】

【構成】 胚乳で発現するプロモーターの下流にイネでんぶん合成酵素遺伝子のセンスDNAまたはアンチセンスDNAを導入してなるベクターをイネ科植物由來のプロトプラストに導入し、アミロース含量の改変された形質転換イネを作出する。

【効果】 本発明によれば、イネのアミロース含量を改変することができるので、コメの食味を意図的に改良したイネを得ることができる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 胚乳で発現するプロモーターの下流にイネでんぶん合成酵素遺伝子のセンスDNAまたはアンチセンスDNAを導入してなるベクター。

【請求項2】 請求項2に記載のベクターをイネ科植物由来のプロトプラストに導入し、コロニーを形成させた後該コロニーから植物体を再生させて得られたイネ科植物。

【請求項3】 請求項2に記載のベクターおよびイネ科植物由来のプロトプラストを液体媒体に懸濁し、電気パルスを印加して該ベクターを該プラスマドに導入した後、イネ培養細胞を含有する培地で培養してコロニーを形成させ、該コロニーから植物体を再生させることを特徴とするイネ科植物の製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、アミロース含量の改変されたイネ科植物およびその製造法に関し、詳細にはイネでんぶん合成酵素遺伝子のセンスDNAまたはアンチセンスDNAを導入することによりコメの食味を意図的に改良したイネ科植物およびその製造法に関する。

【0002】

【従来の技術および発明が解決しようとする課題】 イネは世界の半数以上の人々のために重要な食料であるばかりでなく、コメの栄養価の高いことや、調理の方法が豊富で美味しいことから、その需要はますます高まりつつある。従来、イネの育種は変異の収集（野性種）、栽培種からの無作為的な変異の誘発、あるいはそれらの交配により行われてきた。これは方向性のない雑多な変異の中から目的の形質を持つものを選び出し、純系を作り上げるという、実に多大な労力と時間を要するプロセスである。例えば、ガンマ線照射により栽培種由来の変異体の中から目的の変異体を得ることはできるが、変異処理によってその他の遺伝子も変異を受けている場合が多いので、直ちに栽培品種とするには障害が多い。

【0003】 これに対して遺伝子操作を用いた組換えイネの作出は、目的の形質を司る遺伝子のみを対象にして人工的に改変し導入するので、極めて方向性の高い育種方法を提供することができる。これは、①形質を司る遺伝子を単離し、②この遺伝子を目的の組織や部位で発現し得るように改変し、③かかる遺伝子を植物体に導入し、再生させることによって初めて達成されるものである。

【0004】 ところで、おいしいコメを育種するために従来はかけあわせによる方法が行われてきた。この方法の問題点は、選抜途上で指標となる“おいしさ”的度がないことであった。即ち、従来法では官能検査によって味が判定されるまで、目標が達せられているかどうかが判らなかった。こういった問題から、良食味のイネの成分分析から、生化学的な値を用いて“おいしさ”を評

価しようとする試みが検討されだしてきた。これは、コメの成分を改変することで、“良食味”を達成しようという考え方である。即ち、形質を司る遺伝子そのものを改変し成分の改変を行うことにより確率の高い意図した育種が可能になる。この方向性の高い育種（遺伝子操作法）をおこなうためには現在以下の事が明らかである。

【0005】 まず上記①として、コメの食味試験と生化学的解析からアミロース含量と食味に相関があることが知られている。日本人の米飯に供されるうるち米は、でんぶんの15-30%程度がアミロース、70-85%程度がアミロベクチンであるが、一般にアミロース含量の低い、従って、粘りのある物が良食味の傾向にある。また、アミロースを全くもたないものは、もち米としてうるち米と区別して食している。

【0006】 さて、胚乳のアミロース産生を司るのはでんぶん合成酵素であることがトウモロコシの遺伝生化学的解析 (Parneill, J. Genet., 11, 209-212, 1921) から明らかにされ、またイネ胚乳のアミロース含量は登熟期におけるでんぶん合成酵素蛋白の生産量および活性に依存すること (Villareal, Starch/Starke, 41, 369-371, 1989) がわかつてきた。でんぶん合成酵素 (Wx蛋白) の遺伝子 (Wx遺伝子) はトウモロコシ (Klosgen, Mol. Gen. Gen., 203, 237-244, 1986)、大麦 (Rhiede, Nucl. Acid Res., 16, 7185, 1988)、イネ (Wang, Nucl. Acid Res., 18, 5898, 1990, Okagaki, Genetics, 120, 1137-1143, 1988) ジャガイモ (Visscher, Plant Sci., 64, 185-192, 1989) で単離されている。

【0007】 ②はセンスのWx遺伝子を導入してWx蛋白を産生させたり、アンチセンスのWx遺伝子を導入してその蛋白の産生を抑えたりして植物の形質を優性に改変させるためのDNA部品の選択と構築である。ジャガイモのWx遺伝子のアンチセンスDNAをカリフラワーモザイクウイルスの35Sプロモーターを用いてジャガイモに導入発現した実験例 (Visscher, Mol. Gen. Gen., 225, 289-296, 1991) が報告されているが、その組織特異性、時期特異性については考慮されていない。

【0008】 ③は遺伝子導入の手段であるが、イネにおいてはプロトプラストにエレクロトポレーションでDNAを導入しナース培養を施して植物を再生させる方法 (Shimamoto, Nature, 338, 274-276, 1989) が極めて再現性がよいとされる。このようにWx遺伝子をイネに導入するために最低限必要な条件は散在しているが、これらを集約した形質転換イネの作出には至っていない。

【0009】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、イネ科植物のアミロース含量を改変する目的で検討を重ねた結果、W_x遺伝子のセンスDNAあるいはアンチセンスDNAを植物体に導入することにより、所望のアミロース含量を有するイネを作出することを初めて見出し、本発明を完成するに至った。

【0010】即ち本発明の要旨は、胚乳で発現するプロモーターの下流にイネでんぶん合成酵素遺伝子のセンスDNAまたはアンチセンスDNAを導入してなるベクター、該ベクターを導入して形質転換されたイネ科植物およびその製造法に存する。以下、本発明につき詳細に説明する。本発明において導入するのは、イネでんぶん合成酵素(W_x)遺伝子(Okagaki, Genetics, 120, 1137-1143, 1988)のセンスあるいはアンチセンスDNAである。このDNAはcDNAでもゲノミックDNAでも、また全長でも一部でも良い。

【0011】例えばW_xのアンチセンスDNAを導入する場合、発現したアンチセンスRNAがイネ胚乳でW_xmRNAとハイブリッドを作ると仮定すれば、それらの塩基配列の相同性が高いほど効率が良い。従って導入するアンチセンスDNAはイネ(Oryza)自身のW_x遺伝子を用いることが好ましい。トウモロコシ(Klossgen, Mol. Gen. Gen., 203, 237-244, 1986)、大麦(Rhode, Nucleic Acid Res., 16, 7185, 1988)でW_x遺伝子が単離されており、これらはイネのものとホモロジーがあるが、N末端近(トランジットペプタイド)の配列は相同性が低い。一方Oryza sativaとOryza glaberrimaの間では配列がほとんど一致している(Umeda, Jpn. J. Genetics, 66, 569-586, 1991)。

【0012】また、アンチセンスRNAは内在する本来の遺伝子の転写もしくは翻訳を阻害すると考えられているので、内在するW_xmRNAの1次転写物とハイブリダイズするアンチセンスRNAの錠型となるゲノミックDNA断片を導入すること、あるいは2次転写物とハイブリダイズするアンチセンスRNAの錠型となるcDNAを導入することが好ましい。そこで本発明においては特にゲノミックDNAとしてはW_x遺伝子の翻訳開始周辺を含みさらに数個のイントロンをも含むPst1断片2.3kb(配列表の配列番号1:配列中5'末端から数えて148番め以降は前述のWangの文献に開示されている)参照)を用い、cDNAは2次転写物のほぼ全域にわたると考えられる2.7kb断片を用いることが好ましいと考えられた。

【0013】W_xのセンスDNAを導入する場合は、W_x遺伝子の翻訳領域のN末端にはトランジットペプタイドがありアミロblastへのターゲッティングシグナルと

なっている(Klossgen, Mol. Gen. Gen., 217, 155-161, 1989; ibid, 225, 297-304)。従って、導入した遺伝子からW_x蛋白を作らせアミロblastに蓄積させるためにはインタクトなW_x蛋白が翻訳されるように全翻訳域を用いる必要がある。従って本発明においては、W_x蛋白のオープンリーディングフレーム全域を含む2.7kb W_xcDNAを用いるのが好ましい。この断片には翻訳開始前に0.45kbのリーダー配列が存在する。この配列の機能は明らかでないが翻訳開始周辺の塩基配列について検討した例があるので(Kozak, Microbiol. Reviews, 47, 1-45, 1983) W_x遺伝子由来の配列をインタクトな状態で用いるのが好ましいと考えられた。

【0014】次に上記の遺伝子を導入した発現ベクターを構築する。胚乳でかかる遺伝子を十分量発現させるためには、ベクター構築の際に特異的なプロモーターを用いることが重要となる。現在、イネ胚乳での発現が確認されているプロモーターとして、イネW_xプロモーター(Hirano, Plant Cell Physiology, accepted), トウモロコシAdh1プロモーター(Kyozuka, Mol. Gen. Gen., 228, 40-48, 1991)、カリフラワーモザイクウイルス35Sプロモーター(Terada, Mol. Gen. Gen., 220, 389-392, 1990)があげられる。またその発現の強さはW_x>Adh>35Sと推定されるので、プロモーターの種類を変えることでアンチセンスRNA(またはセンスRNA)の生産量を調節することができると考えられる。従って本発明のベクターの構築に当たっては、発現強度の異なるプロモーターを数種用いるのが好ましい。

【0015】また、遺伝子の発現効率を上げるためにあるいはRNAの安定性を上げるためにイネで機能するイントロンを連結させることも効果的である。イントロンの発現に及ぼす影響については例えば、トウモロコシAdh1のイントロン1がトウモロコシで有効(Callis, Genes & Development, 1, 1183-1200, 1987)であるだけでなく、イネでも効果的であること(Kyozuka, Maydica, 35, 353-357, 1990)や、ヒマカタラザのイントロンがイネで有効に働くこと(Tanaka, Nucleic Acid Res., 18, 6767-6770, 1990)などの報告がある。

【0016】更に効率よく遺伝子の転写を終結させまたRNAを安定させるために、ターミネーターが用いられる。具体的には、ノバリン合成酵素遺伝子NOSのターミネーター(pB1221, Jefferson, EMBO J., 6, 3901-3907, 1987)あるいはカリフラワーモザイクウイルス35S(19S)RNAターミネーター(pGL2, Shimamoto,

Nature, 338, 274-276, 1989) 等が挙げられる。

【0017】組み換え操作においては、pUC系列 (Yanisch-Perron, *Gene*, 33, 103-119, 1985) のプラスミド等が好適に用いられる。本発明においては更に、ハイグロマイシンフォスフォトランスフェラーゼ遺伝子、ネオマイシンフォスフォトランスフェラーゼ遺伝子、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ遺伝子、 β -グルキュロニダーゼ遺伝子等から選ばれる2つ以上の外来遺伝子を使用し、かつその1つは目的とするコロニーを選択する際に有効な、いわゆる選択マーカー遺伝子とするのが好ましい。かかる選択マーカー遺伝子としては、ハイグロマイシンフォスフォトランスフェラーゼ遺伝子が好ましい。

【0018】本発明においては、選択マーカー遺伝子と他の外来遺伝子を同一のプラスミド中に有するものを使用してもよいし、選択マーカー遺伝子を有するプラスミドと他の外来遺伝子を有するプラスミドとを併用してもよい。上述のプラスミド、センスDNA発現用ベクターをW_x遺伝子の劣性変異であるもち米(例えば、むさしもち、祝)に導入することにより、アミロースの合成を復帰させることができ、またうるち米に導入すればさらに高アミロースの米の育成が可能である。

【0019】アンチセンスDNA発現用ベクターをW_x遺伝子の発現しているうるち米に導入することによりアミロースの産生量の低下した種子を得ることができる。かかるプラスミドをイネプロトプラストに導入、再生することによって、アミロース含量の変化したイネを作出する。イネ科植物由来のプロトプラストは次の様にして調製することができる。即ち、梗米として日本晴、あるいは糯米として祝禱、むさしもち等の栽培イネの完熟種子に由来するカルスを通常使用され得る液体培地で培養した後、常法に従い、例えばセルラーゼやマセロザイム等の細胞壁分解酵素を含む酵素液中25~30℃、3~16時間程度酵素処理する。酵素処理終了後ろ過して未消化物を除き、ろ液に2~5倍量のKMC液(塩化カリウム0.118M、塩化マグネシウム0.0817M、塩化カルシウム0.085M、pH 6.0) (*Theor. Appl. Genet.*, 53, 57-63, 1978) 等を加え遠心分離し、精製されたプロトプラストを得ることができる。

【0020】本発明においては、梗米(日本晴)由来プロトプラスト、例えば(2~10)×10⁶個/m¹に対しては、上記の様にして調製したアンチセンスW_xcDNA発現ベクター、あるいはアンチセンスW_xゲノミックDNA発現ベクター、例えば1~100μg/m¹、糯米(祝禱・むさしもち等)由来プロトプラスト、例えば(2~10)×10⁶個/m¹に対しては、センスW_xcDNA発現ベクター(例えば後述のpWse nse CW)、例えば1~100μg/m¹、さらに、

各々の組合せに対し、選抜遺伝子としてハイグロマイシンホストランスフェラーゼをコードするベクター(pGL2: Shimamoto et al, *Nature*, 338, 274-276, 1989)、例えば1~100μg/m¹を30~200mM塩化カリウム、0~50mM塩化マグネシウム、0.2~0.6Mマニトールを含む緩衝液等の液体媒体中に懸濁し、これに電気パルスを印加してプラスミドをプロトプラスト中に導入する。電気パルス処理は、100~1000μFのコンデンサーを用いて得られる200~1000V/cmの初期電圧の直流パルスで、パルス幅1~30msec程度の条件で印加するのが好適である(特開平1-181791号公報参照)。

【0021】上述の様にして電気パルス処理したプロトプラストを、例えばR₂培地(Plant Cell Physiol., 14, 1113, 1973)の無機成分とB5培地(Gamborg et al., 50, 151, 1968)のビタミン混合液を含む液体培地(R₂/B5)好ましくは窒素源として硝酸カリウムを0.2~0.5%含有する培地に懸濁し、これを1.0~3.0%程度のアガロースを含むR₂/B5培地と等量ずつ混ぜ、速やかにシャーレ中に広げてうすく固める。この時のプロトプラストの密度は約(5~50)×10⁵個/m¹となるようにし、またアガロースの厚さは平均0.7mm程度となるようにするのがよい。

【0022】固化したアガロースゲルを5~20mm程度の大きさに切り、上記液体培地で培養する。その際、イネ科植物由来のプロトプラストを使用した場合には、好ましくは培地中にイネ培養細胞を100~300mg FW/シャーレ程度共存させ、20~50r.p.mの回転でゆっくり振とうしながら、暗条件下27~33℃で培養する。

【0023】培養後3~4週間で、0.5~1mmφ程度のコロニーが形成される。その際、例えば選択標識遺伝子であるハイグロマイシンホストランスフェラーゼ遺伝子を導入しておいた場合、培養開始後7~20日にハイグロマイシンを10~50μg/m¹程度培養液中に添加し、更に培養を続けることで形質転換細胞の一次選択を効率よく行うことができる。

【0024】次いでこのコロニーを増殖培地、例えばR2基本培地(Sci. Sin., 16, 659-688, 1975)に植物ホルモン、例えば2,4-ジクロロフェノキシ酢酸(2,4-D)を2mg/リットル程度、アガロースを0.1~1.0%加えた寒天培地上で2~4週間、照明下(1000~4000lux)、27~33℃で培養し、3~6mmφのカルスを得る。このカルスの一部からゲノムDNAを、例えば、Mol. Gen. Genet., 211, 27-34, 1988に準じて単離し、このゲノムDNA約100ngを、次のPCR法に供することで、アンチセンスW_xcDN

AおよびアンチセンスW_xゲノミックDNA、あるいはセンスW_x cDNAのとり込まれた形質転換カルスを二次選択することができる。

【0025】PCR法 (Saiki, Science, 239, 487-491, 1988) は、錠型の熱変性、プライマーと錠型とのアニーリング及び耐熱性ポリメラーゼによる伸長方法からなる工程を繰り返すにより、標的DNA領域を増幅する方法である。本発明においては、上記で得られたゲノムDNAを94℃、1分程度で熱変成して+鎖と-鎖の1本鎖に解離し、導入されたアンチセンスW_x cDNA、あるいはセンスW_x cDNAの+鎖及び-鎖の5'末端に相補的なプライマーをアニーリングした後、耐熱性ポリメラーゼにより相補鎖DNAを合成(72℃、3分程度)するという工程を20~30回繰り返して該相補鎖DNAを増幅する。

【0026】アンチセンスW_x cDNA、およびアンチセンスW_xゲノミックDNA、あるいはセンスW_x cDNAの導入が確認されたカルスを再生培地、例えばR2基本培地 (Sci. Sin., 16, 659-688, 1975) に植物ホルモン、例えばインドール酢酸(IAA)を0.5mg/リットル程度、ゼアチン1mg/リットル程度、アガロース0.6~1.5%加えた寒天培地上で2~8週間、照明下(1000~4000lux)、27~33℃で培養し再生幼植物を得る。次いで幼植物を順化後、温室にて育成することで3~6ヶ月後に種子を形成する。

【0027】導入遺伝子の存在は、ゲノミックDNAのサザン解析 (Southern, J. Mol. Bio 1., 98, 503~517, 1975) によって確認できる。例えばゲノムDNAは (Walbot et al., Mol. Gen. Genet., 211, 27-34, 1988) に準じて調整し、その2μgを50μlの反応系(組成はTOYOBO Co.による)においてEcoRIで切断する。これを1回エタノール沈殿し70エタノールで洗って乾燥し水10μlにとかし泳動用色素 (Molecular Cloning) 2μlを加えて1%アガロースゲル電気泳動(FMC SEAKEM GTGAGAROSE, TBE緩衝液)で分画する。これをアマシャム社ハイボンドNメンブレン取扱い説明書の方法に準じて酸部分分解、アルカリ変成してハイボンドN膜にプロットする。膜は42℃で1時間以上プレハイブリダイゼーションする(50%ホルムアミド×4SSCP (Molecular Cloning) 1% SDS, 0.5%スキムミルク, 0.25mg/ml ウシ精子DNA)。

【0028】プローブはW_x遺伝子のcDNA 2.7kb断片25ngをアマシャム社マルチプライムラベリングキットと[α-³²P] dCTPにより調整する。熱変性したプローブをハイブリダイゼーション液(0.1g、デキストララン硫酸/ml プレハイブリ液)に混合

し、プレハイブリダイゼーション液をきった膜にまぶし42℃で1晩静置する。2×SSC+0.1%SDS 100ml中で15分×2回洗ってプローブの特異的な結合をオートラジオグラフィで検出する。W_x遺伝子のcDNAを導入した場合2.7kbのバンドとして検出され、予めゲノムに存在するW_x遺伝子6kbと区別できる。

【0029】種子あるいは花粉におけるアンチセンスW_x cDNAおよびアンチセンスW_xゲノミックDNAあるいはセンスW_x cDNAの発現は公知の“ヨードによるアミロース検定法”により行なわれる。アミロースおよびアミロペクチンは、製造上の違いから、ヨウ素

(I) 分子との結合力に差があるため、花粉あるいは種子を、例えば7.1mMのヨウ素、34mMのヨウ化カリを含む、ヨード液中におくことで、粳米やその花粉は濃紫色から黒褐色、糯米やその花粉は淡紫色から白色を呈する。かかる呈色反応を指標としてアミロース含量の変化を推定し、アンチセンスW_x cDNA、アンチセンスW_xゲノミックDNA、あるいはセンスW_x cDNAの発現の確認、および発現の程度を判定することができる。

【0030】

【実施例】以下に実施例を挙げて本発明を説明するが、本発明はその要旨を越えない限り本例に制約されるものではない。

(実施例1)

アンチセンスW_xゲノミックスDNAのうるち米への導入

I. ベクターの構築 (pAantiGW) (図1参照) イネW_x遺伝子全域を含むHindIII断片15kb (Okagaki, Genetics, 120, 1137-1143, 1988の図4) をpUCプラスミドにクローニングし、その10μgをPstI 20μlで切断し(TOYOBOの添付したバッファーを用い20μlスケールで37℃1時間反応) 1%seakem GTGアガロース(FMC) ゲル電気泳動(1×TBEバッファー, Molecular Cloning, Maniatis) で分画(MUPID, コスモバイオ, 100V, 30分)し、ゲルを0.5μg/ml 臭化エチデウムで染色して翻訳開始点を含む2.3kbの断片を切り出し、透析膜(三光純薬)に移して4℃ 120mA 1時間の電気泳動によりDNAを回収した。等容量のフェノール(10mM Tris pH8-1mM EDTA pH8で飽和したもの)で振とうし、層を分離して水層を回収する。さらにクロロホルムなどでこのDNA断片を精製しエタノール沈殿(30mM 酢酸ナトリウム存在下に2.5容のエタノールを加え、15000rpm 15分冷却遠心分離し沈殿を回収する)後、5μlの水にとかしその1μlを、PstIで切断

したプラスミドpBluscript II KS+ (Stratagene) 0.1 μgとをTAKARAライゲーションキット (TAKARAの処方による70 μl) を用いて連結した (16°C, 一晩)。

【0031】この5 μlをコンピテントセルDH5α (BRL) に形質転換し (Inoue, Gene, 9, 23-29, 1990) アンビシリソ50 μg/mlを含むマッコンキー寒天培地 (DIFCO) 上でインサートを持つ白いコロニーを選抜した。これらのコロニーに由来する1 ml培養液 (Lプロス、Molecular Cloning) からDNAをアルカリSDS法 (Molecular Cloning) で調製しその1/50量をEcoRI 1u (TOYOBO) で切断して (10 μl反応系 RNase 0.5 μg/mlを含む37°C 30分) 、0.75 kbのバンドを生じるクローニングを選んだ。EcoRI部位は挿入した断片の5'寄り0.75 kbにある。

【0032】このプラスミドにはWx遺伝子の下流にベクターに由来するBamHI部位があるが、ここにトウモロコシAdh1遺伝子 (Callis, Genes & Development, 1, 1183-1200, 1987) のプロモーター1.1 kb (BamHI-BglII) とイントロン522 bp (BclII-BamHI) を挿入した。トランスポーマントは、 Hind IIIで切断するとイントロンとマルチクローニングサイトに挟まれる2.4 kbが検出されるものを選ぶ。このプラスミドはAdh1プロモーター、イントロンの後ろにWx遺伝子が逆向きに連結されている。

【0033】ターミネーターシグナルはカリフラワーモザイクウイルス35S RNA遺伝子由来のものを用いた。プラスミドpCKR138 (Shimamoto, Nature, 338, 274-276, 1989) 10 μgをSacIとKpnIで切断し (TOYOBO処方のバッファー条件で5uつ20 μl反応系37°C 1時間) 電気泳動で0.26 kbのターミネーター断片を得て、これを上記のアンチセンスゲノミックDNAを含むプラスミドのSacI, KpnI部位に挿入してプラスミドpAantiGWを得た。このプラスミドは5'から順にトウモロコシAdh1プロモーター (1.1 kb) 、イントロン (522 bp) 、アンチセンスイネWxゲノミックDNA (2.3 kb) カリフラワーモザイクウイルス35Sターミネーター (0.26 kb) を有する。

【0034】II. 形質転換とアンチセンスWxゲノミックDNAの導入されたカルスの選択、再生
粳米 (日本晴) の完熟種子由来カルスより作製したサスペンションは7日ごとに20 mlのR₂培地で植え継ぎ維持したものを用いた。サスペンション1本分に由来する細胞 (湿重FW約5 g) を20 mlの酵素液 (4%セルラーゼRS, 1%マセロザイムR10, 0.4Mマン

ニトール, pH 5.6) で4~6時間、30°Cで処理し、20 μmのメッシュで濾過した液を1.5容のKMC液 (118 mM塩化カリウム, 81 mM塩化マグネシウム, 85 mM塩化カルシウム, pH 6.0) で稀釈し、遠心分離してプロトプラストを得た。これをKMC液で2回洗浄し、EP3液 (70 mM塩化カリウム, 5 mM塩化マグネシウム, 0.4 Mマンニトール, 0.1%MES, pH 5.8) でさらに1回洗って細胞密度8 × 10⁴ 個/mlとなるようにEP3液に懸濁した。

【0035】粳米 (日本晴) プロトプラスト懸濁液 500 μl (4 × 10⁶ 個) に対しては、上述のアンチセンスゲノミックDNA発現ベクター (pAantiGW) 15 μg (30 μg/ml) とハイグロマイシンフォスフォトランスフェラーゼ (hph) 遺伝子 (pGL2) 15 μg (30 μg/ml) を加え電気パルスを印加した (PROMEGA X-CellTM Electroporation System, 1000 μFコンデンサ, 初期電圧500V/cm, パルス幅2.5 msec, 直流減衰波形)。パルス印加前に20分、印加後に20分サンプルを氷中にて冷却し、等量のR₂/B5プロトプラストアガロース培地 (Mol. Gen. Genet., 206, 408, 1987) と混合し、35 mmφのシャーレで固化させた。これを4分割し60 mmφのシャーレに入れ、R₂/B5プロトプラスト液体培地5 mlとOCサスペンション細胞 (ナース細胞) 約100 mgとを加えて30°C暗下で振とう培養した (50 rpm)。10~14日後、20細胞程度に分裂したときにナース細胞をKMC液で洗浄除去し新たなR₂/B5プロトプラスト液体培地5 mlを加え、さらにハイグロマイシンB (Hm) 30~100 μg/mlを加えて選抜を開始した。これから3週間後、アガロースビーズをHm 40 μg/mlを含むR₂増殖培地 (Mol. Gen. Genet., 206, 408, 1987) に移し、2週間培養するとアガロース表面に耐性カルスが出現した。このカルスを個別にとり再びR₂増殖培地 (Hm 40 μg/ml) で選抜を行い増殖のよい黄色カルスを「耐性カルス」として選んだ。

【0036】ハイグロマイシン耐性カルスの一部からゲノムDNAを調製し、アンチセンスWxゲノミックDNAの一部をプライマーとしたPCRを行うことでアンチセンスWx DNAの導入されたカルスをさらに選抜した。ゲノムDNAはMol. Gen. Genet., 211, 27-34, 1988に準じて次の様に調整する。

【0037】ハイグロマイシン耐性カルス 50~100 mgを緩衝液 (15%ショ糖, 50 mMトリス-塩酸 (pH 8.0), 50 mM Na EDTA, 500 mM 塩化ナトリウム) 中で磨碎し、核分画を遠心分離する。これを界面活性剤 (1.5% SDS, 20 mMトリス-塩酸 (pH 8.0), 10 mM EDTA) で処理し、

遊離した核内成分を0.6容のイソプロパノールで沈殿させて核酸を得、これを70%エタノールで洗浄後乾燥させてゲノム分画とする。この分画100ngをPCR法に供した。この時、プライマーはpAantiGWの+鎖のad h 1のプロモーター領域、18塩基（プライマー（A）；68-85；Dennis et al, N

ucl. Acids Res., 13, 727-743, 1985 5'ACCGCTTAGGCGATTGTC3'）と、-鎖の第3イントロン、第3エクソン部分、18塩基（プライマー（B）；配列番号：1の1713番-1730番；
【化1】

第3イントロン←→第3エクソン

）を用いた。PCR法はPerkin Elmer社のDNA Thermal Cycler機を用い、同社のGene-Amp kitのプロトコールにより試薬を混和し、反応液100μlを、熱変性94℃、1分、アニーリング61℃、2分、耐熱性ポリメラーゼによる伸長反応72℃、3分のサイクルを30回くりかえすことで行った。反応後1/10量をアガロースゲル電気泳動で分析し増幅したバンドを検出した。アンチセンスWxゲノミックDNAの導入が確認されたカルスを、R2再生培地（Mol, Gen, Genet., 206, 408, 1987）におき、2週間毎に培地を交換しながら培養することで、4～8週間後に不定胚由の再生植物を得た。この幼植物を、バーミキュライトと培土を混合したものに移植し、順化したのち、温室で育成した。3～6ヶ月後に成熟したイネとなり種子を形成した。

【0038】III. 花粉および完熟種子におけるアンチセンスWxゲノミックDNAの発現の確認

花粉、あるいは完熟種子胚乳部分の切片（1mm幅）を、ヨード液中におき浸透させた。5分後、粳型イネ（アミロース含量15～25%）の花粉では黒褐色、糯型イネ（アミロペクチン100%）の花粉では茶褐色を呈し、アンチセンスWx遺伝子の導入されたイネの花粉は、粳型、糯型、両者の中間型が混在することが観察された。完熟種子胚乳切片においても、粳米では黒紫色、糯米では白色を呈するのに対し、アンチセンスWx遺伝子の導入された種子では、粳米以外に中間型を呈するものが観察された。

【0039】（実施例2）

アンチセンスWx cDNAのうるち米への導入

ベクター（pAantiCW）の構築（図2参照）

このプラスミドは実施例1のベクターと2つの点で異なっている。アンチセンスDNAとしてcDNAを用いたことと、ターミネーターとしてNOS遺伝子由来のシグナルを用いたことである。以下その構築について述べる。

【0040】プロモーター、イントロンは実施例1と同じものにしてpAIGN（Kyozuka, Maydica, 35, 353-357, 1990）を改変して用いた。まず、pAIGNのNOSターミネーターの後ろにあるEcoRI部位を消去するために、このプラスミド1μgをEcoRIで切断（TOYOB0処方）、エ

タノールで精製しKlenowフラグメント（TOYOB0 10u）で末端を修復した（TOYOB0の条件20μl 37℃ 30分）後、0.1μgを自己環化（TAKARA ライゲーションキット40μl 16℃一晩）してトランスフォーマントを得た。

【0041】EcoRIで消化されないクローン（pAIGNe）を選び、その1μgをSacI（TOYOB0）で切断（TOYOB0処方20μl反応系30℃30分）、エタノールで精製してT4DNAポリメラーゼ（TOYOB0の条件10u室温5分）で末端を揃え、エタノール沈殿の後SmaI（TOYOB0）で切断しエタノール沈殿してその0.1μgにEcoRIリシンカ（TOYOB0 1μg）を連結した（TAKARAライゲーションキット16℃ 40μl一晩）。トランスフォーマントの中から、クローン（pAIGNe）より1.8kb（GUS遺伝子相当分）短く、かつEcoRIで1か所切断されるクローン（pAlecON）を選ぶ。

【0042】一方、Wx遺伝子のcDNAは以下のようにして調製した。イネアメリカ長粒種ラベルの開花後6～8日のミルキーな胚乳10gからフェノールSDS法（Current Protocols in Molecular Biology）により全RNAをとり、ファルマシアmRNAピューリフィケイションキットを用いてmRNAを精製した。その5μgを錠型にしてファルマシアcDNA合成キットを用いてcDNAを得てこれをpUC19のEcoRI部位に挿入してつくったcDNAライプラリに対して、トウモロコシのWx遺伝子プローブ（Okagaki, Genetics, 120, 1137-1143, 1988の図3-#2）を用いてスクリーニングを行い（Molecular Cloning）、2.7kbのWx cDNAを得た。このクローンはWx遺伝子の全翻訳域を持ち0.45kbのリーダー配列をもつ。このWx cDNA断片をEcoRIを用いてpUCベクターより切り出し、上述のクローンpAlecONのEcoRI部位にプロモーターと逆向きに挿入してpAantiCWを得た。

【0043】形質転換とアンチセンスWx cDNAの導入されたカルスの選抜、再生
実施例1のpAantiGWのかわりにここではpAanticiCWを用い、以下同様にしてカルスを得た。遺伝子の組込まれたカルスの検出のためにPCRを行なうが、

このプライマーとして W_x cDNA の + 鎌の第 2 、第 3 エクソンにまたがる 18 塩基 (プライマー (C) ; 配列番号 : 1 の 1595 番 - 1603 番及び 1717 番 - 1725 番 ; 5' GCCATGGCT/GCGAATG GC 3') と、 - 鎌の第 4 、第 5 エクソンにまたがる 18 塩基 (プライマー (D) ; 配列番号 : 1 の 2108 番 - 2100 番及び 2003 番 - 1996 番 ; 5' TC CCCAAC/CTTCTCCA3') を用いた。また、再生体の葉より (Walbot, Mol. Gen. Gen., 211, 27-34, 1988) の方法に準じて抽出したゲノミック DNA を Eco RI 切断し W_x 遺伝子の cDNA をプローブにしてサザン解析を行い、導入した 2.7 kb のバンドを検出した。以下、実施例 1 と同様に処理し、成熟イネの再生を行った。

＜花粉および完熟種子におけるアンチセンス W_x cDNA の発現の確認＞実施例 1 と同様に行い、同様の結果を得た。

【0044】(実施例 3)

アンチセンス W_x cDNA のうるち米への導入

ベクター (p35 anti CW) の構築 (図 3 参照) このプラスミドは、カリフラワーモザイクウイルス 35 S プロモーターの下流にアンチセンス W_x cDNA および NOS ターミネーターを持つ。35 S プロモーターと NOS ターミネーターは pB1221 (Jefferson, EMBO J, 6, 3901-3907, 1987) に由来し GUS 遺伝子をアンチセンス W_x cDNA と置換した。以下その方法を説明する。

【0045】pB1221 のターミネーターの後ろにある Eco RI 部位を潰すために、このプラスミド 1 μ g を Eco RI (TOYOB0 処方の条件 10 μ l 37°C 1 時間) 、エタノール沈殿、 Klenow フラグメント (TOYOB0 処方の条件 20 μ l 37°C 30 分) の順に処理しその 0.1 μ g を TAKARA ライゲーションキットで自己環化し得られたトランスフォーマントの中から Eco RI 部位を失ったものを選択する。

【0046】このプラスミド 1 μ g を Sac I 处理 (10 u TOYOB0 の条件 20 μ l 37°C 1 時間) の後、塩濃度を 100 mM に上げて 10 u の Bam H I を加えさらに 1 時間反応させる。エタノール沈殿後 Klenow フラグメント (TOYOB0 の処方 20 μ l 37°C 30 分) で末端を平滑化し Eco RI リンカー (TOYOB0 1 μ g) と共に環化する (TAKARA ライゲーションキット)。トランスフォーマントの中から 1.8 kb (GUS 遺伝子) を失い Eco RI 部位を持つ物を選ぶ。

【0047】このプラスミド 1 μ g を Eco RI (10 μ l 反応系) で切断しアルカリリフォスファターゼ (1 u TOYOB0 Eco RI 反応液に 1M Tris 8.31 μ l と水 40 μ l を加え 65°C 30 分) 处理する。フェノール、クロロホルム、エタノールで精製し

その 0.1 μ g と実施例 2 で述べた W_x cDNA 2.7 kb 0.1 μ g とをライゲーションし 35 S プロモーターに対して逆向きに挿入された物を選ぶ (p35 anti CW)。以下このプラスミドを用いて、実施例 1、2 と同様に、形質転換、カルスの選抜、再生および発現の確認を行い、実施例 1、2 と同様の結果を得た。

【0048】(実施例 4)

アンチセンス W_x cDNA のうるち米への導入ベクター (pWanti CW) の構築 (図 4 参照)

このベクターはイネ W_x プロモーターの下流にイネ W_x 遺伝子のアンチセンス cDNA, NOS ターミネーターが連結されており、ゲノムに存在する W_x 遺伝子と時期を同じくしてアンチセンス cDNA を発現させることを意図して構築したものである。

【0049】まず、 W_x プロモーターについて説明する。 W_x 遺伝子全域をカバーする Hind III 15 kb 断片 (Okagaki Genetics, 120, 1137-1143, 1988 の図 4) を制限酵素を用いて分析すると転写領域をもつ Eco RI 6 kb 断片の 5' 側に隣接して Eco RI 3 kb 断片があることがわかる。この断片に W_x 遺伝子のプロモーターがあることは容易に推定できるが、我々の実験によれば、この断片を GUS レポーター遺伝子、NOS ターミネーターと連結したプラスミド (Jefferson, EMBO J, 6, 3901-3907, 1987; pB1221 の 35 S プロモーターを W_x プロモーターと置換することで得られる) は、イネプロトプラストを用いたトランジェントアッセイにおいてプロモーターとして機能することを確認している。そこでこの Eco RI 断片をプロモーターとして用いることとした。この断片は Hind III 15 kb 断片を持つ pUC プラスミド Eco RI で切断すれば 3 kb のバンドとして得られる。

【0050】NOS ターミネーターは、pCAMVneo (Fromm, Nature, 319, 719-793, 1986) 10 μ g を Pst I と Hind III で切断し (TOYOB0 の処方 20 μ l 37°C 1 時間) アガロースゲルで分画して 0.27 kb のバンドとして得ることができるのでこれをプラスミド pUC19 の Pst I - Hind III 部位に挿入した。

【0051】NOS ターミネーターの 5' 上流にある Eco RI 部位に前述の Eco RI 3 kb 断片を順方向に挿入し W_x プロモーターと NOS ターミネーターとを連結した。このプラスミドには Eco RI 部位が 2 か所あるので、このプラスミド 10 μ g を 100 μ l の系で Eco RI 10 u を加えて 1、2、5、10 分反応させ Eco RI による部分分解物を得、エタノール沈殿の後 Klenow フラグメント (TOYOB0 の処方) で修復して自己環化させ、トランスフォーマントの中から、 W_x - NOS の間にだけ Eco RI 部位を残したプラスミドを得た (pWanti CW')。

【0052】このプラスミドをEcoRIで線状化し、実施例2で述べたW_x cDNA (EcoRI 2.7 kb断片)を逆向きに挿入してpWantiCWを得た。以下このプラスミドを用いて、実施例1～3と同様の実験を行い、同様の結果を得た。

【0053】(実施例5)

W_x遺伝子のセンスDNAのもち米への導入

ベクター(pWsenseCW)の構築(図4参照)
このベクターはW_x蛋白を発現しているうるち米あるいは発現していないもち米に、品種名ラベルのW_x蛋白を作らせるための構造をしており、W_xプロモーターの下流にW_xセンスcDNA、NOSターミネーターを持つ。このプラスミドの構築は実施例4に従うが、プラスミド(pWantiCW')にW_x cDNA 2.7 kbを順方向に連結することで得られる。

【0054】<形質転換とセンスW_x cDNAの導入されたカルスの選抜、再生>糯米(祝福、むさしもち)の完熟種子由来カルスより作製したサスペンションからプロトプラストを調製し、実施例4のプラスミドpAaⁿtⁱGWのかわりにpW_xsenseCWを用いて実施例1同様に遺伝子を導入し、ハイグロマイシン耐性カルスを得た。カルスから単離したゲノミックDNAについて実施例2と同じプライマーを用いてPCRを行い導入遺伝子の確認を行った。また、再生葉からゲノミックDNAを単離し実施例2と同様EcoRIで切断しW_x遺伝子のcDNAを用いたサザン解析で確認した。

【0055】<花粉および完熟種子におけるセンスW_x cDNAの発現の確認>実施例1のように花粉、種子を染色し、もち型イネにセンスW_x遺伝子を導入した植物の種子ではもち型以外にうるち型(あるいは超うるち

型)を示す種子が観察された。

【0056】

【発明の効果】本発明においては、W_x遺伝子のセンスDNAあるいはアンチセンスDNAを植物体に導入することにより、所望のアミロース含量を有するイネを作出することが可能である。

【0057】

【配列表】配列番号: 1
配列の長さ: 2286
配列の型: 核酸
鎖の数: 2本鎖
トポロジー: 直鎖状
配列の種類: ゲノミックDNA
起源
生物名: イネ (Oryza sativa)
株名: Labelle
配列の特徴
特徴を表わす記号: CDS
存在位置: 1265..1603
特徴を決定した方法: S
特徴を表わす記号: CDS
存在位置: 1717..1797
特徴を決定した方法: S
特徴を表わす記号: CDS
存在位置: 1905..2003
特徴を決定した方法: S
特徴を表わす記号: CDS
存在位置: 2100..2189
特徴を決定した方法: S

配列

CTGCAGTCTC	TCTCTCTCTC	TCTCTCTCTC	TCTCTCTCTC	TCTCTCTCTG	CTTCACTTCT	60
CTGCTTGTG	TGTTCTGTTG	TTCATCAGGA	AGAACATCTG	CAAGGTATAC	ATATATGTTT	120
ATAATTCTT	GTTTCCCTC	TTATTCTAGAT	CGATCACATG	CATCTTTCAT	TGCTCGTTT	180
TCCTTACAAG	TAGTCTCATA	CATGCTAATT	TCTGTAAGGT	GTTGGGCTGG	AAATTAAATTA	240
ATTAATTAAAT	TGACTTGCCA	AGATCCATAT	ATATGCTCTG	ATATTAAATC	TTCGTTCGTT	300
ATGTTGGTT	AGGCTGATCA	ATGTTATTCT	AGACTCTAGA	GAAACACACC	CAGGGGTTT	360
CCAACAGT	CCACAAGATG	GTCGGCTAGC	TGACCTAGAT	TTGAAGTCTC	ACTCCTTATA	420
ATTATTTTAT	ATTAGATCAT	TTTCTAATAT	TCGTGTCTT	TTTTATTCTA	GAGTCTAGAT	480
CTTGTGTCA	ACTCTCTTA	AATCATGTCT	CTCGCCACTG	GAGAAACAGA	TCAGGAGGGT	540
TTATTTTGGG	TATAGGTCAA	AGCTAAGATT	GAAATTCA	AATAGTAAAA	TCAGAATCCA	600
ACCAATTATA	GTAGCCGAGT	TGGTCAAAGG	AAAATGTATA	TAGCTAGATT	TATTGTTTG	660
GCAAAAAAAA	ATCTGAATAT	GCAAAATACT	TGTATATCTT	TGTATTAAGA	AGATGAAAAT	720
AAAGTAGCAGA	AAATTAAAAA	ATGGATTATA	TTTCCTGGGC	TAAAAGAATT	GTGATTGTTGG	780
CACAATTAAA	TTCACTGTCA	AGGTTTGTG	CAAGAATTCA	GTGTGAAGGA	ATAGATTCTC	840
TTCAAAACAA	TTAACATCATT	CATCTGATCT	GCTCAAAGCT	CTGTCATCT	CCGGGTGCAA	900
CGGCCAGGAT	ATTTATTGTG	CAGTAAAAAA	ATGTCATATC	CCCTAGGCCAC	CCAAGAAACT	960
GCTCCTTAAG	TCCTTATAAG	CACATATGGC	ATTGTAATAT	ATATGTTGA	GTGTTAGCGA	1020
CAATTTTTT	AAAAACTTTT	GGTCCTTTTT	ATGAACGTTT	TAAGTTTCAC	TGTCTTTTT	1080
TTTCGAATT	TAAATGTAGC	TTCAAAATTCT	AATCCCCAAT	CCAAATTGTA	ATAAACTTCA	1140

ATTCTCTAA TTAACATCTT AATTCACTTA TTTGAAACCC AGTTCAAATT CTTTTAGGCT 1200
 CACCAAACCT TAAACAATTC AATTCACTGC AGAGATCTTC CACAGCAACA GCTAGACAAC 1260
 CACC ATG TCG GCT CTC ACC ACG TCC CAG CTC GCC ACC TCG GCC ACC GGC 1309
 Met Ser Ala Leu Thr Thr Ser Gln Leu Ala Thr Ser Ala Thr Gly
 1265 1270 1275
 TTC GGC ATC GCC GAC AGG TCG GCG CCG TCG TCG CTC CGC CAC GGG 1357
 Phe Gly Ile Ala Asp Arg Ser Ala Pro Ser Ser Leu Leu Arg His Gly
 1280 1285 1290 1295
 TTC CAG GGC CTC AAG CCC CGC AGC CCC GCC CGC GGC GAC GCG ACG TCG 1405
 Phe Gln Gly Leu Lys Pro Arg Ser Pro Ala Gly Gly Asp Ala Thr Ser
 1300 1305 1310
 CTC AGC GTG ACG ACC AGC GCG CGC ACG CCC AAG CAG CAG CGG TCG 1453
 Leu Ser Val Thr Thr Ser Ala Arg Ala Thr Pro Lys Gln Gln Arg Ser
 1315 1320 1325
 GTG CAG CGT GGC AGC CGG AGG TTC CCC TCC GTC GTC GTG TAC GCC ACC 1501
 Val Gln Arg Gly Ser Arg Arg Phe Pro Ser Val Val Val Tyr Ala Thr
 1330 1335 1340
 GGC GCC GGC ATG AAC GTC GTG TTC GTC GGC GCC GAG ATG GCC CCC TGG 1549
 Gly Ala Gly Met Asn Val Val Phe Val Gly Ala Glu Met Ala Pro Trp
 1345 1350 1355
 AGC AAG ACC GGC GGC CTC GGT GAC GTC CTC GGT GGC CTC CCC CCT GCC 1597
 Ser Lys Thr Gly Gly Leu Gly Asp Val Leu Gly Gly Leu Pro Pro Ala
 1360 1365 1370 1375
 ATG GCT GTAAGCA CACACAACT TCGATCGCTC GTCGTCGCTG ACCGTCGCTG 1650
 Met Ala
 TCTTCACTG TTCTTGATCA TCGCATTGGA TGGATGTGTA ATGTTGTGTT CTTGTGTTCT 1710
 TTCCAG GCG AAT GGC CAC AGG GTC ATG GTG ATC TCT CCT CGG TAC GAC 1758
 Ala Asn Gly His Arg Val Met Val Ile Ser Pro Arg Tyr Asp
 1380 1385 1390
 CAG TAC AAG GAC GCT TGG GAT ACC AGC GTT GTG GCT GAG GTA 1800
 Gln Tyr Lys Asp Ala Trp Asp Thr Ser Val Val Ala Glu
 1395 1400
 GGAGCATATG CGTGATCAGA TCATCACAAG ATCGATTAGC TTTAGATGAT TTGTTACATT 1860
 TCGCAAGATT TTAACCAAG TTTTGTGGT GCAATTCAATT GCAG ATC AAG GTT GCA 1916
 Ile Lys Val Ala
 1405
 GAC AGG TAC GAG AGG GTG AGG TTT TTC CAT TGC TAC AAG CGT GGA GTC 1964
 Asp Arg Tyr Glu Arg Val Arg Phe Phe His Cys Tyr Lys Arg Gly Val
 1410 1415 1420
 GAC CGT GTG TTC ATC GAC CAT CCG TCA TTC CTG GAG AAG GTGGAGT 2010
 Asp Arg Val Phe Ile Asp His Pro Ser Phe Leu Glu Lys
 1425 1430 1435
 CATCATTAGT TTACCTTTT TGTTTTACT GAATTATCAA CAGTGCATT AGCAGTTGGA 2070
 CTGAGCTTAG CTTCCACTGG TGATTCAG GTT TGG GGA AAG ACC GGT GAG AAG 2123
 Val Trp Gly Lys Thr Gly Glu Lys
 1440 1445
 ATC TAC GGA CCT GAC ACT GGA GTT GAT TAC AAA GAC AAC CAG ATG CGT 2171
 Ile Tyr Gly Pro Asp Thr Gly Val Asp Tyr Lys Asp Asn Gln Met Arg
 1450 1455 1460
 TTC AGC CTT CTT TGC CAG G TCAGTGATTA CTTCTATCTG ATGATGGTTG 2220

Phe Ser Leu Leu Cys Gln

1465

GAAGCATCAC GAGTTTACCA TAGTATGTAT GATTCTATAAC TAATTCTGT ATTGATCTAC 2280

CTGGCAG

2286

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の発現ベクターpAantigWの構築

概念を表わす図面である。

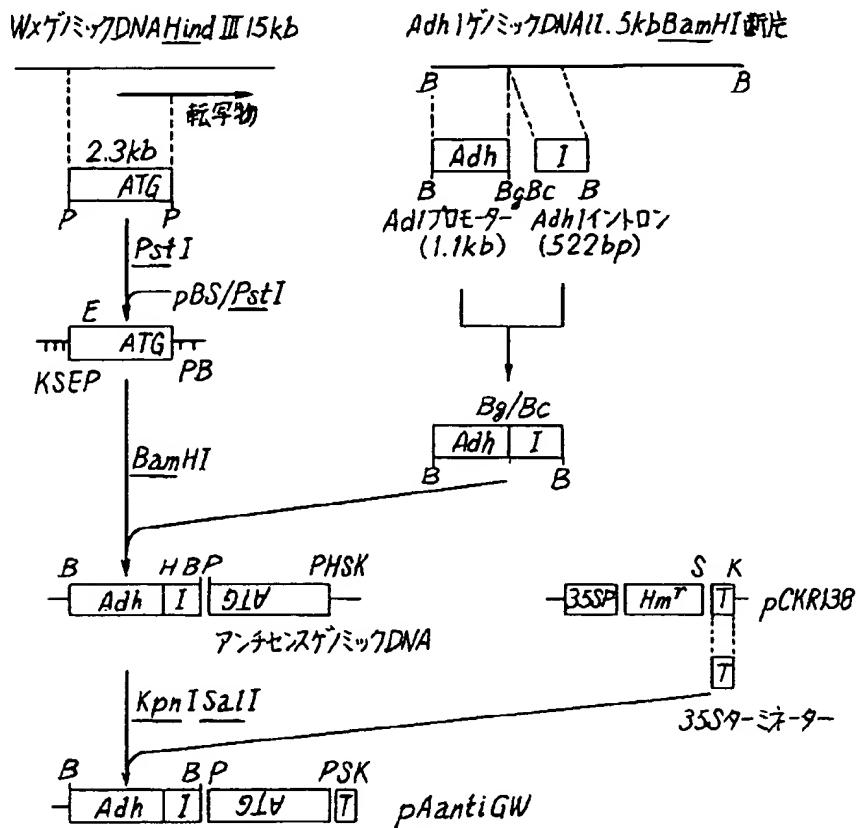
【図2】本発明の発現ベクター-pAnticWの構築

概念を表わす図面である。

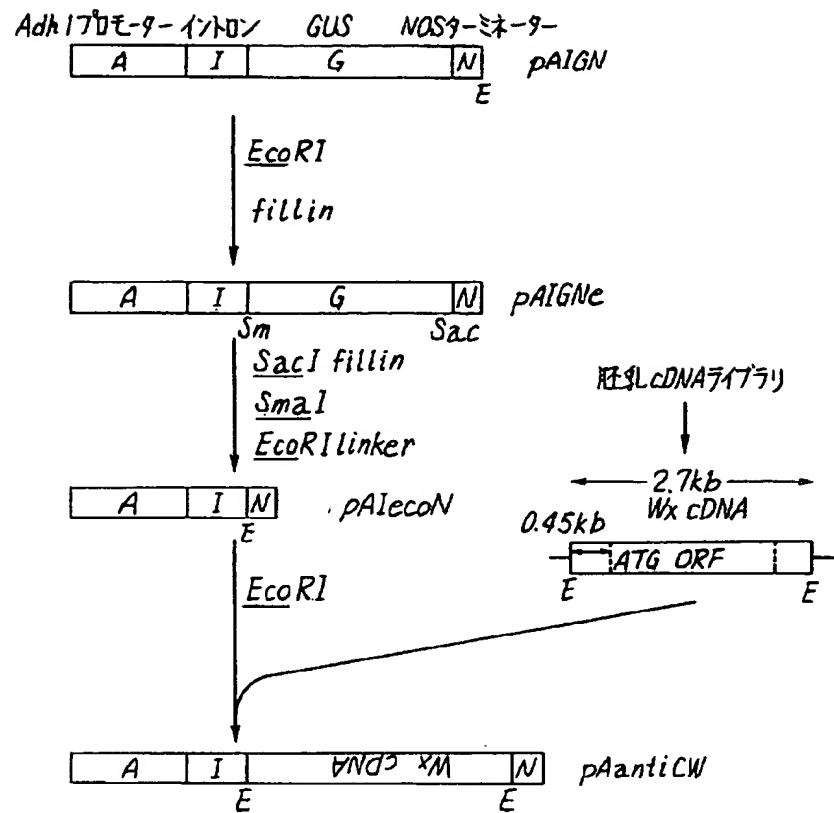
【図3】本発明の発現ベクターp35antidiCWの構築概念を表わす図面である。

【図4】本発明の発現ベクターpWantiCWの構築概念を表わす図面である。

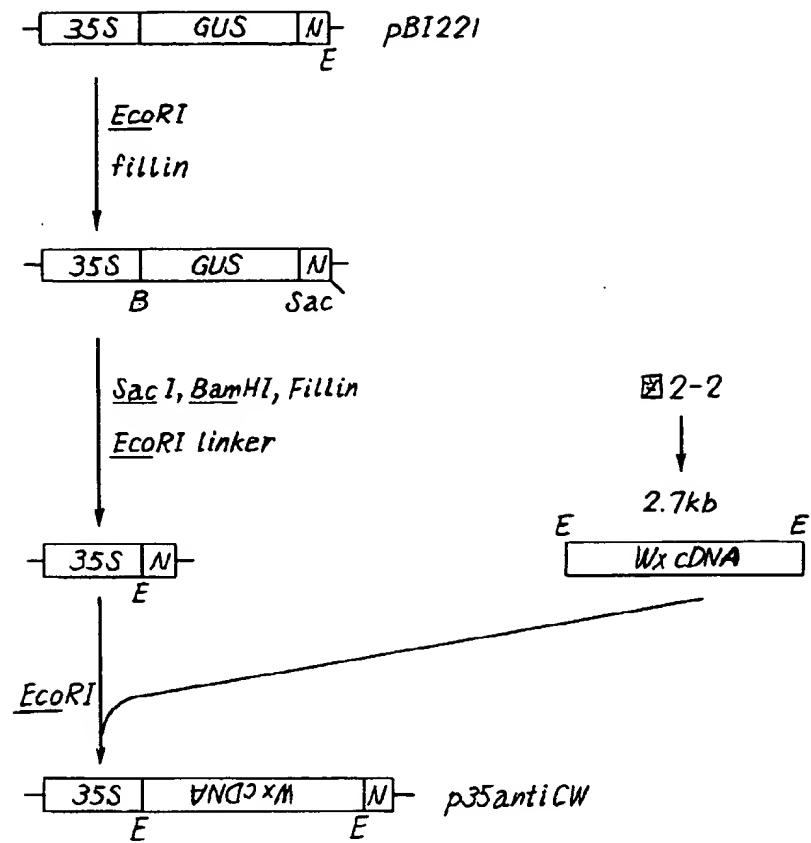
〔図1〕



【図2】



【図3】



【図4】

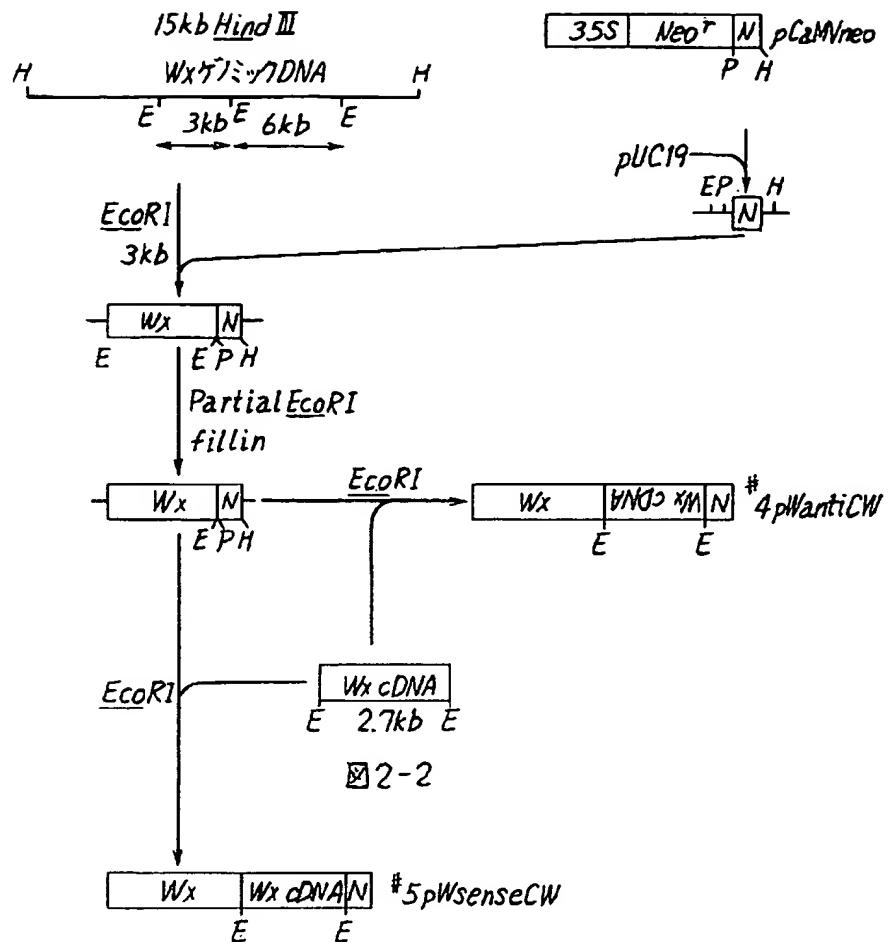


図2-2

【手続補正書】

【提出日】平成4年10月16日

【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0038

【補正方法】変更

【補正内容】

【0038】III. 花粉および完熟種子におけるアンチセンスWxゲノミックDNAの発現の確認
 花粉、あるいは完熟種子胚乳部分の切片（1 mm幅）を、ヨード液中におき浸透させた。5分後、粳型イネ（アミロース含量15～25%）の花粉では黒褐色、糯型イネ（アミロベクチン100%）の花粉では茶褐色を呈し、アンチセンスWx遺伝子の導入されたイネの花粉は、粳型、糯型、両者の中間型が混在することが観察された。完熟種子胚乳切片においても、粳米では黒紫色、糯米では白色を呈するのに対し、アンチセンスWx遺伝

子の導入された種子では、粳米以外に中間型を呈するものが観察された。

IV. 後代の植物体におけるアンチセンスWxゲノミックDNAの発現の確認

上記II. で再生した植物体（R₀世代）に形成された種子（R₁世代）を播種し、これより形成された種子（R₂世代）の胚乳のアミロース含量を上記III. と同様にしてヨウ素呈色比色法で測定したところ、5.5～19%であった（粳米品種の日本晴は20%）。

【表1】

世代	R ₁	R ₂	アミロース含量 (%)	世代	R ₀	R ₁	アミロース含量 (%)
N01	1		15	N01	1		10
	2		16		2		11
	3		16				
	4		16				
	5		16.5				
	6		16.5				
	7		16.5				
	8		16.5				
	9		17				
	10		17				
	11		17.5				
	12		17.5				
	13		18				
	14		18				
	15		18.5				
N02	1		5.5				
	2		10				
	3		14				
	4		15				
	5		19				

以上の結果から、ゲノミックアンチセンスW_x遺伝子を粳米品種に導入することによりアミロース含量を低下させることができ、かかる形質は後代まで遺伝されることが確認された。

【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0047

【補正方法】変更

【補正内容】

【0047】このプラスミド1μgをEcoRI(10μl反応系)で切断しアルカリフィオスマターゼ(1u TOYOB_O EcoRI反応液に1M Tris 8.31μlと水40μlを加え65℃ 30分)処理する。フェノール、クロロホルム、エタノールで精製しその0.1μgと実施例2で述べたW_x cDNA 2.7kb 0.1μgとをライゲーションし35Sプロモーターに対して逆向きに挿入された物を選ぶ(p35antriCW)。以下このプラスミドを用いて、実施例1、2と同様に、形質転換、カルスの選抜、再生および発現の確認を行い、実施例1、2と同様の結果を得た。また再生した植物体(R₀世代)の中からアンチセンスW_x遺伝子が導入されたものをサザン法で選抜し、その種子(R₁世代)の胚乳を調べたところ、アミロース含量およびW_x蛋白量とともに減少した個体の存在が確認された。R₁世代におけるアミロース含量の分布は、0.5~17%程度であった(図5)。さらにアミロース含量の低下した種子(R₁世代)を播種し、これに形成された未熟胚乳のRNAをサザン解析したところ、W_xのmRNAの減少が認められた。

【表2】

【手続補正3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0052

【補正方法】変更

【補正内容】

【0052】このプラスミドをEcoRIで線状化し、実施例2で述べたW_x cDNA (EcoRI 2.7kb 断片)を逆向きに挿入してpWantiCWを得た。以下このプラスミドを用いて、実施例1~3と同様に、形質転換、カルスの選抜、再生および発現の確認を行い、同様の結果を得た。また再生した植物体(R₀世代)の中からアンチセンスW_x遺伝子が導入されたものをサザン法で選抜し、その種子(R₁世代)の胚乳を調べたところ、アミロース含量およびW_x蛋白量とともに減少した個体の存在が確認された。R₁世代におけるアミロース含量の分布は、0.5~17%程度であった(図5)。さらにアミロース含量の低下した種子(R₁世代)を播種し、これに形成された未熟胚乳のRNAをサザン解析したところ、W_xのmRNAの減少が認められた。

【手続補正4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0055

【補正方法】変更

【補正内容】

【0055】<花粉および完熟種子におけるセンスW_x cDNAの発現の確認>実施例1のように花粉、種子

を染色し、もち型イネにセンスW_x遺伝子を導入した植物の種子ではもち型以外にうるち型（あるいは超うるち型）を示す種子が観察された。

＜後代の種子におけるW_x mRNAの確認＞再生した植物体（R₀世代）の中からセンスW_x遺伝子が導入されたものをサザン法で選抜し、その未熟種子（R₁世代）のRNAを調べたところ、品種ラベルに匹敵するmRNAを産生している個体が確認された。また完熟種子のアミロース含量とW_x蛋白量との関係は、図6に示すように品種ラベルと同等の高レベルであり、日本の栽培品種より上回っていた。R1世代のアミロース含量分布は、19～35%程度であった（糯品種は0%、日本の粳品種日本晴は20%、アメリカの粳品種ラベルは28%）。以上の結果から、センスW_x遺伝子を糯品種に導入することによりアミロース含量を増加させることができ、かかる形質は後代まで遺伝されることが確認された。

【手続補正5】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】図面の簡単な説明

【補正方法】変更

【補正内容】

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の発現ベクターpAantiCWの構築

概念を表わす図面である。

【図2】本発明の発現ベクターpAantiCWの構築概念を表わす図面である。

【図3】本発明の発現ベクターp35antiCWの構築概念を表わす図面である。

【図4】本発明の発現ベクターpWantiCWおよびpWsenseCWの構築概念を表わす図面である。

【図5】アンチセンスペクターpWantiCWを導入した形質転換体の胚乳（R₁世代）のアミロース含量とW_x蛋白量との関係を表わした図面である。図中、★はコントロール（日本晴）を、■は形質転換体1を、●は形質転換体2を示す。

【図6】センスペクターpWsenseCWを導入した形質転換体の胚乳（R₁世代）のアミロース含量とW_x蛋白量との関係を表わした図面である。図中、★はコントロール（日本晴）を、●はコントロール（祝糯）を、△は形質転換体を示す。

【手続補正6】

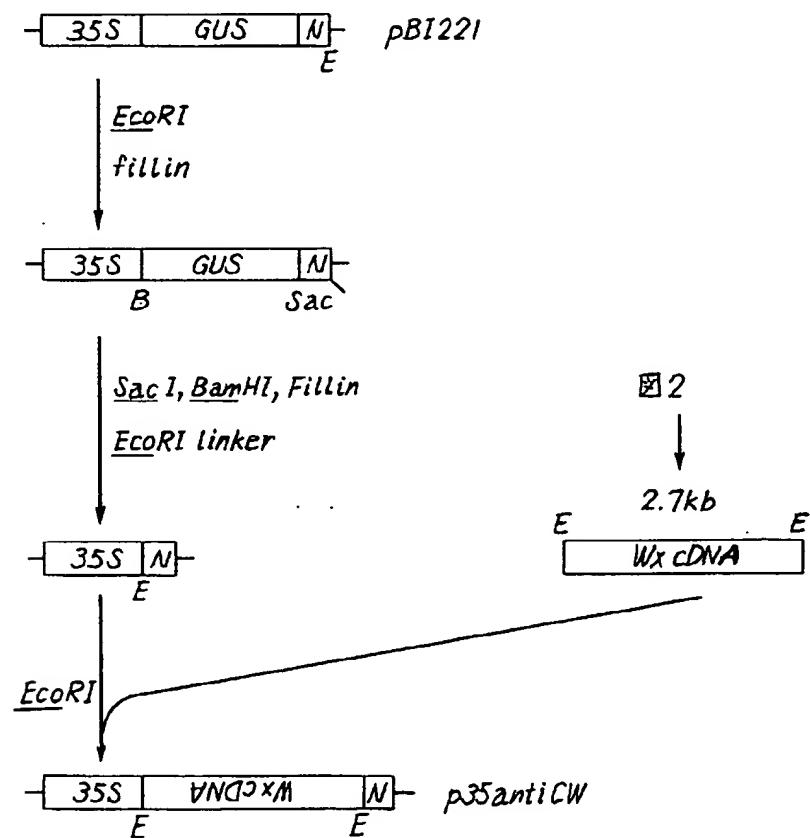
【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】図3

【補正方法】変更

【補正内容】

【図3】



【手続補正7】

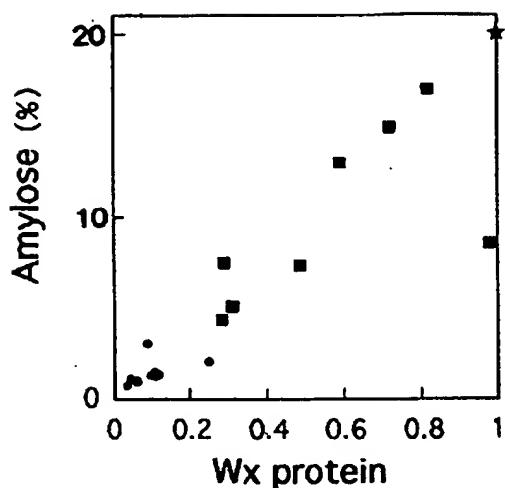
【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】図5

【補正方法】追加

【補正内容】

【図5】



【手続補正8】

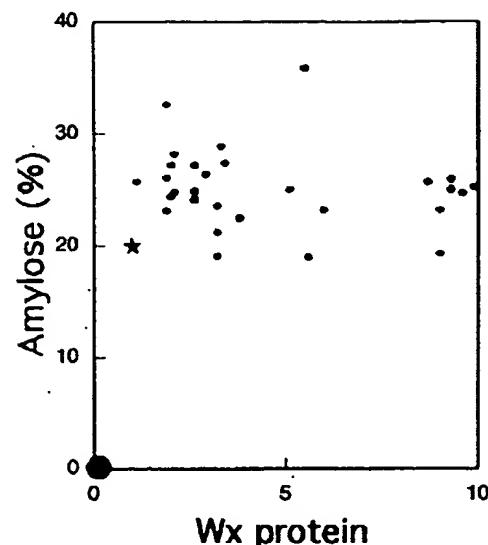
【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】図6

【補正方法】追加

【補正内容】

【図6】



フロントページの続き

(51) Int. Cl. ⁵

C 12 N 5/10

識別記号

府内整理番号

F I

技術表示箇所

(72) 発明者 伊藤 紀美子

神奈川県横浜市緑区鴨志田町1000番地 株
式会社植物工学研究所内

(72) 発明者 島本 功

神奈川県横浜市緑区鴨志田町1000番地 株
式会社植物工学研究所内

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record**

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

BLACK BORDERS

IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES

FADED TEXT OR DRAWING

BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING

SKEWED/SLANTED IMAGES

COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS

GRAY SCALE DOCUMENTS

LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT

REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY

OTHER: _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.